

農作物技術情報 第8号の要約

令和8年10月29日発行

岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部

技 術 の 要 約	
水稲	技術対策 今年の栽培管理から、生育に対応した必要な対策を実施できたか、コスト面での無駄はなかったか等、来年に向けて振り返りを行う。
畑作物	生育状況 ：大豆は、平年並みの成熟期を迎えている。小麦は、適期には種作業が行われたほ場が多く、出芽、初期生育は良好である。 技術対策 大豆：汚損粒発生防止のため、事前に青立ち株や大型雑草を抜き取るとともに、莢先熟がみられるほ場では子実水分・茎水分の低下を確認のうえ、速やかに収穫を行う。 小麦：除草剤を散布していないほ場では、小麦の生育や雑草の発生状況に応じた土壌処理剤を選択し、必ず散布する。ほ場が乾いたら麦踏みを行い、凍上害や倒伏を回避する。
野菜	生育状況 ：果菜類の収穫は終盤となり、出荷量は少なくなっている。ねぎは順次出荷が進んでいる。ほうれんそうの生育は概ね良好である。 技術対策 共通：来年の安定生産に向け、栽培終了後は作物残さを適切に処分し、資材の消毒を行うなど病虫害発生源を排除する。来作に向け、土壌分析の結果等に基づいた適正な施肥管理を計画する。 施設野菜：冬期間に温度確保が必要となる施設野菜では、暖房装置の点検等を含めた省エネルギー対策を実施するとともに、作目の特性や生育ステージに合わせた適正な温度管理を行う。 寒じめほうれんそう：出荷できる葉長になった時点でハウスの入口やサイドビニールを開け、1週間程度5℃以下の低温に連続して遭遇させ、葉柄のBrix値8%以上を確保する。 促成アスパラガス：根株は5℃以下の積算遭遇時間90時間以上を目安に掘り取り、伏せ込み後の収量を確保する。
花き	生育状況 ：りんどう、小ぎくとも出荷終盤となっている。 技術対策 共通：今年の栽培を振り返り、翌年の作付計画を立てる。 りんどう：残茎処理などの秋じまい管理は遅れないよう行う。 小ぎく：計画的な伏せ込み作業により、健全な親株を確保する。
果樹	生育状況 ：りんごの果実生育（横径）は前年をやや上回り、概ね平年並。「ジョナゴールド」の果実品質は、平年より糖度がやや高く、10月上旬から中旬に収穫期を開始した。 技術対策 晩生種「ふじ」は食味を重視して収穫する。着色や蜜入りを待ち過ぎて収穫を遅らせると、果肉の軟化や果実の樹上凍結等が懸念され、貯蔵性が低下するので、適期収穫に努める。
畜産	技術対策 大家畜：低下する気温に合わせて、10～30%の増飼を行い、泌乳量の確保や繁殖機能の回復、早期受胎に努める。 子牛：寒さは発育に大きく影響するため、有効な保温対策と換気などの環境管理を励行し、疾病予防のため、ワクチン接種も検討する。
野生獣	人身被害対策 ブナの結実が「豊作」で人里に下りてくるとは少なくなると見込まれるが、農作物などの味を覚えた個体の下りてくる可能性があるため、引き続き最大限の注意を払う。 冬期間も恒久電気柵を継続して使用する場合は、雪に埋まらないワイヤーのみに通電させるなどの漏電や破損の対策を行い、冬期間に使用しない場合は、ワイヤーを全て下ろす。 来年度に向けて、今年度の課題と対策を確認する。

詳細については「いわてアグリベンチャーネット」をご覧ください。<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>
(「いわてアグリ」と検索すると上位に表示されます)

○農薬適正使用:使用前に必ずラベルを確認し、使用基準の厳守と飛散防止を心がけてください。

○9月15日～11月15日秋の農作業安全月間「「これくらい…」 少しの油断が事故のもと 初心忘れず安全作業」

日没が早まる時期なので、無理をせず安全第一の農作業を心掛ける。

次号は令和8年11月26日(木)発行の予定です